

古

畑

直

定

朗



〜星野先生のミス〜

3

午後10:00

---

「えー、どうも。今回は、星野公男君との対決です。いやー、AR。どんどん、悪い事しますね。DIE！って事で、行ってみましょう。」

東京・帝都大学病院。

「急患です!!早く!!そこのけ!!そこのけ!!」

ストレッチャーに乗せられた女性が、ER(緊急救命室)へと運ばれていった。

緊急救命室へ運ばれた女性のところへ早速、外科医の星野公男がやってきた。星野は、この病院で一位二位を争う敏腕外科医である。

「患者は？」

「えー、水野美奈さん、23歳。どうやら、本棚の下敷きになったようです。意識不明。かなりの出血もしています。」

「そう。わかった。」

星野は、ERへと入っていった。そして、星野は、メスを握った。

30分程で手術は、無事に終了した。なんとか、患者は、助かった。

看護師長の岩沼が、話しかけてきた。

「お疲れ様でした。星野先生。」

「うん。」

「テンション低いですけど、大丈夫ですか？」

「ああ・・・いつもの事だから。」

「あっ、そうですか。それより、お客様がいらしているようですよ。」

「客？」

「ええ。あの、いつもの人ですよ。」

「ああ、また来たんだ。」

「とにかく、応接室に待たせていますので、よろしくです。」

「・・・わかったよ。」

星野は、応接室へと向かった。部屋に入ると、黒いスーツ姿の男がいた。

「古畑さん。ども。」

「あー、へへへ。どーも。星野先生。」

「水野さん、助かりましたよ。」

「そうですか！いやー、良かったよかった。ほんと、先生のお陰です。はい。でえ、水野さん、意識は？」

「いえ、まだ術後ですから、意識は戻ってませんよ。まあ、3時間もすれば、戻るでしょう。」

「そうですか。いや、事件の被疑者が謝りたいと申しとおりましたね。ホント、DIE！なんですけど、とりあえず、パトカーで待たせます。意識が戻ったら、教えてください。へへへ。」

「わかりました。」

星野は、応接室を出た。時計を見た。午後10:00。古畑は、まだ3時間はいると言った。まあ、なんとかかなるだろう。

帝都大学病院は、昭和の初めの頃に建てられた病院で、病棟が7棟にも分かれている。建て増しによって、その入り組んだ構造から、別名、迷路病院とも呼ばれている。長くいる看護師や、医師でも、迷ってしまう程である。

星野は、東病棟から、中央病棟の自分の部屋へと戻った。次の手術は、午後11:00からだった。時間が遅いのは、薬の効果が切れる時間を待っていたからである。逆に言えば、星野がこの時間に合わせるようにして薬を投与したのだが。

そして、午後10:45。星野の部屋の電話が鳴った。

「もしもし。星野だ。」

「一もしもし。星野先生？着いたわよ。言われた通り、見つからないように、南病棟の裏口にいるから。」

「わかった。少し、待っててくれ。緊急のオペが入っちゃったから。」

「一長くなりそうなの？」

「いや、大丈夫。3時間ぐらいで終わる。」

「一わかったわ。じゃ、ここで待ってるわ。」

「うん。じゃ、あとで。」

星野は、電話を切った。これで準備は、整った。星野は少し、笑みをこぼした。

午後11:00。星野は、再び、東病棟の手術室へ向かった。

「じゃ、始めます。」

手術が始まった。星野にとって長い、長い手術の始まりだった。

手術が始まり、患者も良好な状態だった。落ち着いたところで、

「中原君、ちょっと、ココから変わってくれ。」

「あっ、はい。」

「ちょっと、トイレに行きたいっす。」

「わかりました。」

後輩の中原に、変わってもらい、星野は、手術室を出た。

持ってきたストップウォッチのスタートを押した。

トイレは、手術室の準備ルームにあるが、星野は、そのトイレの鍵を、外から10円玉で回して閉めた。そして、電気をつけて、星野は、手術室の準備ルームを出た。一気に走り出し、一目散に、南病棟へ向かった。

この入り組んだ構造を知り尽くしていると自負があった星野。普段は、誰も使わない倉庫を通る。その倉庫の中に、階段があり、その階段を下りると南病棟に行けるのである。ほとんどの人が知らない近道だった。そして、警備室の前を通る。

だが、警備室には、警備員がちょうど、テレビを見ながら休憩していた。テレビには、先ほど、自分が手術をした水野美奈の事件を放送していた。犯人は、青田ZAP隆一郎。星野は、驚いた。中学の同級生である青田が、犯人だったなんて……。

しかし、そんな事を考えている場合ではなかった。すると、警備員が、奥の部屋へと消えた。星野は、チャンスと思い、一気に、警備室の前を抜け、南病棟の裏口を出た。

「由希子!!」

「星野先生?!手術中じゃないんですか?!」

あまりにも、勢いよく、出てきた星野にビックリしてしまった。そして、星野は、

「死ね!!!」

持ってきたスパナで、思いっきり、彼女を殴りつけた。

「……何すんのよ……。うう。」

「痛そうだな。ハハハ。」

もう一度、殴りつけた。そして、星野は再び、来た道を急いで引き返した。

そして、手術室の準備ルームへと戻り、トイレの鍵を開け、中へと入った。時間は、4分15秒。

「成功だな。」

そして、星野は、何食わぬ顔をして手術室へと戻った。少し、息が荒かった。

「星野先生がお戻りです。」

「引き継ぎます。」

「お願いします。」

しかし、星野は、驚いた。手が震えているのだ。普段、ほとんど動揺などしない自分が、人一人殺しただけで、こんなにも症状が出るとは。こんな状態では、手術など出来るはずがなかった。

「中原君。」

「はい。」

「君、もうどれぐらいだっけ?」

「ここに来てからですか?」

「うん。」

「もう3年です。」

「そっか。じゃあ、ここから、やってみて。難しいところは、終わってるから、大丈夫でしょ。」

急に言い出した星野の意見に、周りも驚いた。

「あっ、はい!光栄です。しっかり、やらせていただきます。」

星野は、少し後ろに下がり、中原を見ていた。しかし、内心、自分が犯したたった4分間の出来事の事しか考えられなかった。

「歳とったかな。」

そんな風に星野は、思った。

午前0:00

---

そして、警備員によって南病棟裏口で、撲殺体が見つかったと古畑のところへ連絡が来た。古畑は、ぶらぶらとやってきた。

「んーどーも。」

鑑識の米丘さんこと、コメさんがいた。

「おッ。これは、古畑のおやじ。」

「んー早いね。コメさん。」

「ちょうど、この近くで事件があったもんで。」

「事件？なんかあったの？」

「ええ、あっちもどうやら、殺人みたいですよ。ほら、すぐその、帝大競技場あるでしょ。そこで、アメフト部のコーチが殺害されたって。」

「あれま。私に、連絡なかったけど。」

「泉舞さんが、陣頭指揮取ってるみたいですよ。古畑さん、水野さんと青田さんについて行っちゃったからって。」

「ああそう。で、DIE？」

「ああ、この方は、帝都大学病院医療事務センターの鈴木由紀子さん。28歳。」

「ふーん。」

「誰かに殴られたんでしょうね。」

「ふーん。へへへ。」

古畑は、事情聴取に回る事にした。帝都大学医療事務センターは、帝都大学病院の隣だった。しかし、こんな時間だと、夜勤の警備員以外、ほとんど人がいなかった。

そして、帝都大学病院側にも、回った。

看護婦長の岩沼にまずは、話を聞いた。

「あらー、鈴木さんがね。殺されちゃったの？」

「ええ。」

「何があったのかねえ。全く。」

「何か、知りませんかねえ？」

「そーねえ、あっ、そういえば、ほら、あなたとも仲が良い、星野先生。鈴木さんと、以前、付き合ってたのよ。でも、鈴木さんのお父様が大反対されてね。」

「何でまた？」

「鈴木さんのお父様といえば、あの東都医療大学病院の理事長さんよ。」

「それが？」

「星野先生、本当は、東都医療大学病院に呼ばれていたのに、お金につられて、こっちに決めちゃったのよ。それが、あのお父様の逆鱗に触れちゃったみたいでね。」

「そうなの。」

「でも、星野先生、その時間は、私も立ち会って手術中だったから、犯行なんか無理ね。」

「手術中？」

「ええ。こんな時間に手術が入るのも急患でもないのに珍しいんだけどね。」

「なんで、この時間に？」

「なんでも、投与している薬の時間を間違えちゃったらしくてね。星野先生が。まあ、最近、手術続きだったから、疲れてたんでしょうけど。」

「ふーん。」

「あら、やだ。夜勤の巡回中だったんだわ。じゃあね。犯人わかったら教えてね。おほほほほ。」

古畑は、どうも、あーいうおばちゃんが苦手だった。

「星野先生ね……。」

そして、古畑は、星野が手術を行っていた手術室へ向かった。それは、犯行現場から、かなり離れた東病棟の端だった。古畑は、泉舞に電話を掛けた。

しばらくすると、泉舞がやってきた。

「古畑さん、こっちでも事件だそうで？」

「あっちは、どうなの？」

「それが、さっぱり。」

「あーそう。で、泉舞君さ、こっから、南病棟の裏の犯行現場まで、走って行って。」

「はあ?!無理だし!!」

「行け!!DIE!!」

そして、泉舞は、走り出した。

しばらくすると、泉舞から電話がかかってきた。

「古畑さん、はあはあ、つきました。はあはあ、南病棟の裏の犯行現場に。」

「何分？」

「6分21秒です。」

「あーそう。ありがとう。」

そして、古畑は、手術に立ち会った、中原先生の元へ向かった。

「あー、星野先生、確かに、手術中、一回出て行かれましたよ。」

「どこに？」

「トイレですよ。」

「どれくらいでした？」

「えーと、ちょうど、手術時間を計ってたから、出られたのが、23:40で、帰ってこられたのが、23:44でしたよ。」

「詳しく覚えてらっしゃいますねー。」

「ええ。一応、医師なんでね。時間と腕は、正確じゃないと。」

「もう一度、聞きますが、本当に、そうでしたね？」

「ええ。疑うなら、オペ中のビデオ見たらどうですか？」

古畑は、その映像を見た。確かに、23:40に出て、23:44頃に星野が帰ってきていた。しかし、そのあとの映像にも興味を持った。星野は、いったんメスを握るが、すぐに、中原にバトンタッチしていたのである。中原は、

「いやー、星野先生、珍しく、僕に、譲ってくれたんですよ。あの人、普段、そんな事しないのに。」

「普段は？」

「あの人、他の人の腕は、あんまり信用してないみたいでね。自分が担当した手術は、よほどの事が無い限り、全部自分でやるんですよ。」

「へえ。」

「まっ、やっと、僕も認められたって事かな。ハハハ。」

古畑は、そんな笑っている中原を後に、星野の部屋へ向かった。

「いやー、仮眠中のところ、申し訳ない。」

「なんすか？古畑さん。」

「いやーね、星野さん、実は、殺人事件がありましてね。」

「え？どこで？」

古畑は、指で、ココと表現した。

「ココで?!」

「ええ。南病棟の裏なんですがね。」

「で、誰が殺されたの？」

「医療事務センターの鈴木由紀子さんです。」

「鈴木さんか。」

「星野先生もよくご存じだそうです。」

「古畑さん、僕の事、疑ってます？まあ、先に言っておきますけど、確かに、鈴木由紀子と、俺は、昔、付き合っていましたよ。でも、特に問題もなく、普通の別れ方をしました。もちろん、あいつの親父が認めてくれなかったのも大きいですけどね。でも、普通の別れ方です。しかも、僕には、殺せませんよ。なぜなら、今さっきまで、手術してましたからね。そして、すぐに帰ってきて、ここで仮眠してましたから。」

「そのようです。へへへ。」

「じゃ、お帰りください。次の手術までに仮眠したいので。」

「あっ、先生、水野さん、意識戻りました？」

「ああ、戻ったんじゃないですか？ナースセンターで聞いてみてください。意識戻ってれば、青田と、会わせても良いですよ。」

「そうですか。星野先生、青田さんとは、お知り合いですか？」

「ええ。中学の同級生です。しかも、かなり仲が良かった。」

「そうですか。では、失礼しました。」

古畑は、星野の部屋を出た。病院内をうろちょろし始めた。もう外は、明るくなり始めていた。すると、清掃員のおばちゃんが話しかけてきた。



「あらー、あなた、何かあったのかい？」

「ええ。まあ。」

「そう。大変ねえ。ご両親のどちらか？」

「いやいや、刑事です。」

「あらー、刑事さんが。撃たれちゃったのね。」

「おばちゃん、ここ長いの？」

「そりゃ、もう、30年近く働いてるわよ。」

「あのさ、ちょっと、聞きたいんだけど・・・。」

古畑は、南病棟への近道を聞いた。

「あるわよー。倉庫よ。」

「倉庫？」

「あの、東病棟の手術室の前に、倉庫があるでしょ？あそこの中に、実は、南病棟に通じる階段があってね、そこ通れば、あっという間に、行けるわよ。」

「ふーん。そう。ありがとう。」

古畑は、走り出した。そして、再度、東病棟の手術室の前にやってきた。時計で時間を計りながら、倉庫に入り、階段を下り、出た。1分30秒。

「えー、皆さん、おわかりですねー。意外とあっさりとは行きませんでしたかね。いやー、しかし、今回のトリック、実は、本家本元、古畑任三郎の方でも使われていたトリックなんです。しかも、かなりガン似(笑)一度で良いから、書いてみたかったんです。お許してください(笑)気になった方は、桃井かおりさんが、出演した「さよなら、おたかさん」をご覧ください。では、解決編で。」

午前1:00

---

古畑は、再び、星野の部屋を訪れた。星野は、仮眠の最中だった。

「何度もすいません。」

「犯人わかったんすか？」

「ええ。まあ。へへへ。一つだけ、お聞きしたいのですが、この部屋にテレビは、ありませんね？」

「ないですよ。で、誰だったんですか？」

「携帯電話のワンセグも？」

「携帯のテレビ機能なんて、使ったこともありません。で、犯人は？」

「えー、犯人は、星野先生、あなたです。」

「だーかーらー、俺には無理だって言ってんだろ。大体、手術中だったって。」

「私は、確かに、鈴木さんが殺された事は、お話ししましたが、いつ殺されたかとは申しておりません。」

「・・・いや、だって、あの話の流れからだ、ついさっきみたいな。」

「確かに、ついさっきでした。ですが、申しておりません。なのに、なぜ、あなたは、手術中に起きた事件だとわかったんですか？」

「・・・大体、あのタイミングで、来たら、誰もが思うだろ！」

「そうですか。普通なら、いつ、殺されたんですか？と聞く方が、先ですがね。へへへ。」

「とにかく、俺には無理だよ。南病棟の裏なんか、行けっこないさ。」

「星野先生、手術中に、トイレに行かれたそうですね。」

「ええ。そりゃあ、人間ですからね。」

「4分ほど。」

「時間まで覚えてませんよ。」

「でも、中原先生がはっきり、覚えてました。医師には、正確な時間と腕が必要だとも申しております。」

「じゃあ、4分だったんじゃないの？でも、無理ですよ。あの手術室から、南病棟の裏口までは、どんなに走っても、4分じゃ行けません。なんなら、色んなこの病院関係者に聞いてもらっても良い。」

「そうでしょうね。私も、確認しました。」

「ほらー、じゃあ、無理じゃん。」

「でも、行けるんです。長年働いてる、清掃員のおばちゃんが教えてくれました。倉庫を使えば、1分30秒で行けるんです。往復で、3分。そして、殴って殺すのに1分。十分な時間です。へへへ。」

「・・・。でも。」

「そして、あなたは、もう一つ。ミスを犯しました。」

「・・・何？」

「なぜ、運ばれてきた急患の水野さんの事件の犯人が、青田さんだと知っていたんですか？」

「そりゃ、テレビで見たから。」

「どこのテレビで?!」

「いや・・・携帯の?」

「ワンセグは、使わないのに?」

「・・・いや、使ったかも。さっきここに帰ってきてから。」

「そうですか。ちょっと携帯を拝借します。」

古畑が、星野の携帯のワンセグ機能をつけた。しかし、アンテナを立てても映らなかった。

「どうやら、電波がないみたいです。この部屋。」

「・・・。ハハ。お手上げだよ。もういいよ。古畑さん。確かにね、殺しました。」

「やっぱり。へへへ。」

「実は、鈴井由紀子と付き合ってる時に、お金を借りていたんです。1000万ぐらい。でね、返さないと、お父さんに言いつけるって。言いつけられたら、俺の医師人生は、終わってしまう。今まで手に入れた地位も、なにかもなくなっちゃうって。だから、やってしまったんです。」

「そうですか。有能な方なのに。残念です。」

電話が鳴った。星野が取って少し話してから、

「古畑さん、水野さんが、目を覚ましたそうです。」

「そうですか。じゃあ、青田さんを連れてきましょう。星野さんも、行きましょう。」

「情けないですね。同級生同士、同じ日に事件を起こすなんて。」

「いーえ、正確には、次の日です。行きましょう。へへへ。」

時計の針は、午前1:00を回っていた。

2006年12月31日

作・三楽亭 田嶋